

Ars Emmerana

著者不明

Last-Modified: 2022/10/23

西牟田祐樹 訳

第一章から第四章までの部分訳である。底本はL.M. de Rijk, *Logica Modernorum: a Contribution to the History of Early Terminist Logic: Vol II - Part II*, Assen: Van Gorcum, 1967 を使用した。写本は München, bayerische Staatsbibliothek, Clm 14458, ff.45ra-48vb, <https://daten.digital-sammlungen.de/0004/bsb00046448/images/index.html?ip=193.174.98.30&seite=91&pdfseitex=> (accessed:2020/04/25) で確認することが出来る。[]は訳者による付加である。

I 命題について

命題についての発見や見解に対して非常に多くの軋轢が生じるので、命題について語られねばならない。まず初めに命題の諸部分について、つまり名辞と動詞について語られねばならない。そしてより根本的なもの、つまり音響から始められねばならない。

音響について

音響は次のように説明される。音響とは耳に固有な可感的なものまたは耳に固有なものが届くことである。さらに音響のあるものは音声であり、あるものは非音声である。非音声である音響は例えば足音の騒音や樹木のざわめきである。音声である音響は動物から自然的な器官でもって生み出されるものである。これが類の種への分割である。音声とは舌で空気を打つことであり、気管と呼ばれる喉のある部分によって発せられ、動物の口から作り出されるものである。

音声について

音声の内あるものは表示的であり、あるものは表示的でない。表示的な音声とは何かを表示作用するものであり、例えば「人間」、「動

物」などである。非表示的音声とは何も表示作用しないものである。例えば‘blictrix’, ‘sindiarisis’がそうである。表示的音声の内あるものは語や言表がそうであるように規約によって表示的であり、あるものは自然によって表示的である。表示作用する際に自然的に表示作用するいかなるものも規約によっては表示作用しない。例えば怒ったまたは喜んだ犬の唸り声がそうである。また病人の呻き声は自然的に意味表示する。接尾辞が‘-vum’であるいかなる名刺も能力を表示作用する。しかし‘-vum’は現在[分詞]の接尾辞を持つ言表の代わりに置かれる。例えば‘significativum’は‘significans’と同様に理解される。規約によって意味表示する音声の内あるものは語であり、あるものは言表である。言表は心的概念を表示作用するもの、あるいは共表示作用するものを単純表示作用することが出来る、あるいは単純共表示作用することが出来るものである。

語について

語の内であるものは名辞であり、あるものは動詞である。この区分は弁証論者の間では十分である。名辞は代名詞と主語となることが出来る副詞を含み、動詞は分詞を含む。一方、主語となることが出来ない副詞と前置詞と間投詞は文の部分ではなく、言表の部分であるような小辞であるとポエティウスは言っている。共範疇語は共表示語とも呼ばれる。

名辞について

名辞とは時制なしに規約によって表示作用する音声であり、その諸部分は付加的に表示作用しないものである。「限定かつ正格で」を付け加えるべきであると言う者もいるが、付け加えるべきではない。もし付け加えられるならば、語「名辞」が受け入れられる仕方に従って名辞の説明規定が変更可能にならないだろう。一方でアリストテレスは『カトーの』あるいは『カトーに』などこのようなものは名辞ではなく、名辞の格である」と言っており¹、名辞の適用(niminis appellatio)は正格かつ限定な名詞に制限されている。さらに名辞は主格とも呼ばれる。非限定名辞は否定辞と何らかの名辞からなる名辞と言われる。例えば「非石」、「非人間」がそうである。限定名辞は否定辞が前置されていない名辞とも呼ばれる。

今や名辞の説明規定において措定されたものどもが何をもたらずかについて考察せねばならない。「音声」はポエティウスが言うように名辞の類である。種差「意味表示的」は意味表示的でない音声を除くものである。種差「規約によって」は自然的に表示作用する音声を除く

¹ 『命題論』 2, 16b1-2

るものである。「時制を伴って」が付け加えられることによって時制なしに意味表示する名辞から動詞が除外される。たとえ「時」、「日」が時を意味表示しても、それらのいかなるものも時制を伴っては意味表示しない。なぜなら時制は名辞の偶有性ではないからである。「そのいかなる部分云々」が付け加えられることによって言表が分離される。言表の諸部分はそれ自体で意味表示する[からである]。名辞の説明からいかなる名辞も言表や語ではないことが明らかである。。もし名辞‘respublica’(国家)や‘jusjurandum’(誓約)について[名辞の説明規定が]批判されるならば、音声‘respublica’や‘jusjurandum’の形には二つの音声が隠れていると言おう。その一方は語だけであり、他方は言表だけである。

動詞について

動詞は時制を伴って規約によって表示作用する音声であり、そのいかなる部分も付加的に表示作用しないものである。「時制を伴って」は名辞を除外するために付加される。名辞の性質は時制なしに表示作用するもの[だからである]。同じものが名辞かつ動詞であると認めるならば、同じものが時制を伴ってかつ時制なしに表示作用することを考察しよう。もし何かが名詞ならば、そのものは時制なしに表示作用する。もし何かが動詞ならば、そのものは時制を伴って意味表示する。それゆえ、もしもし何かが名辞かつ動詞ならば、そのものは時制を伴ってかつ時制なしに表示作用する。このことに関しては名詞と動詞の説明規定は片方[のみ]が満たされると言おう。両方の[説明規定が満たされるためには]項辞‘alicuius’(何か)が付け加えられねばならない。次のようにである。名辞とは何かを表示作用する音声である等々。動詞とは何かを表示作用する音声である等々。それゆえ同じ音声が何かを時制なしに、かつ時制を伴って表示作用することは禁止されていない。

名辞の説明規定において「限定かつ正格で」が付け加えられるべきではないのと同様に、動詞の説明規定においても付け加えられるべきではないことに注意せよ。正格の動詞は現在時制の動詞とも呼ばれる。一方、任意の他の時制の動詞は斜格の動詞とも呼ばれる。不定動詞は否定辞を伴う動詞と呼ばれる。例えば‘non-currit’(走らない)と‘non-legit’(読まない)がそうである。

言表について

言表とは規約によって表示作用する音声であり、そのある部分は付加的に表示作用するものである。「時制を伴ってあるいは時制なしに」は付加されるべきではない。なぜなら片方が付け加えられることで、説明規定が不十分になるからである。言表の内あるものは完全であり、あるものは不完全である。完全言表は会話をするために十分に使える言表のこ

とである。不完全言表とは会話をするために十分には使えない言表のことである。ボエティウスが言うように完全文(完全言表)には最狭義の分割で五つの種がある。疑問文、命令文、嘆願文または祈祷文、願望文、言明(enuntiatiua)である。疑問文は例えば「魂は不死であるか」がそうである。命令文は例えば「熱心に訓練せよ」がそうである。嘆願文または祈祷文は例えば「主よ」がそうである。願望文は例えば「より上達しますように」がそうである。言明は例えば「ソクラテスが走る」がそうである。言明言表(enuntiatiua oratio)と呼ばれても言明と呼ばれても、真または偽を表示作用する言表と呼ばれても命題と呼ばれても同じものとして扱われるべきである。

命題について

命題とは真または偽を意味表示する言表のことである。さらに、任意の命題は言明可能な何か(aliquid enuntiabile)を表示作用する。そして言明可能なもの、命題を意味表示するもの、不定詞句(dictum)、真、偽のいずれで呼ばれようと同じように扱われる。

いかなる言明可能なものにも二つの名(appellatio)がある。一つは正格から対格に[された名辞]と不定形の動詞が使われている。〈欠落〉例えば、もし命題「ソクラテスは人間である」が何を表示作用するのかと問われるならば、‘quod Socrates sit homo’または‘Socratem esse hominem’(ソクラテスが人間であるということ)と答えよ。

定言命題について

命題の内あるものは定言であり、あるものは仮言である。定言命題と述定命題(predicativa)と単純命題は同じものである。‘categorica’(定言)は‘categorizo, categorizas’に由来し、これは[ラテン語では]‘predico, predicas’である。‘predicativa’は‘predico termino’に由来してそのように呼ばれる。単純命題は諸部分が欠けていないが主要部分に諸命題を持たないものと呼ばれる。

定言命題には二つの主要部分がある。つまり、述語項辞と主語項辞である。さらに、二つのそれ以外のものがある、つまり記号と繫辞である。主語項辞とは何について(de quo vel de quibus)言葉が述べられるかが知られるところのものである。述語項辞とは何かについて何が述べられるかが知られるところのものである。記号とは命題の量が区別されるところの項辞のことである。繫辞とは述語が主語に述定されるところの存在動詞のことである。例えば「全ての人間は動物である」、この命題において「人間」は主語、「動物」は述語、「全ての」は記号、「である」は繫辞である。いかなる動詞も存在動詞を除いては繫辞になることが出来ないことに注意せよ。さらに、呼格の動詞が繫辞であることは許されない。存

在動詞は隣接する第三のものである時、つまり前提命題においてのように主語と述語の間に置かれている時でなければ常に繫辞であることはない。さらに、存在動詞は繫辞ではない時、述語であるか、述語の部分である。述語である時は例えば‘Aliquid est’（何かがある）であり、述語の部分である時は例えば‘Aliquid est hicintus’である。なぜならここで言表全体 ‘est hicintus’が述語であるからである。

述語または主語を持つもの[について]

さらに述語のみを持つ命題、主語と述語を持つ命題、主語も述語も持たない命題について考察すべきである。全ての斜格の存在名詞あるいは主要代名詞(pronominis primitivi)は主語となることが出来る。それらは呼格を除いて述語となることは出来ない。一般にいかなる斜格も述語にならない。同様に、副詞の内あるものは主語となり、あるものは主語とならない。いかなる副詞も述語とならない。全ての場所の副詞、全ての時間の副詞、全ての数の副詞は疑問文や関係文を除いて主語となる。同様に、最初のもと同様に二人称の代名詞は斜格であろうと正格であろうと主語になるだけである。他の全ての正格の代名詞は関係代名詞のみを除いて主語となりかつ述語づけられる。全ての直説法動詞は述語となるだけである。一方、不定動詞と直説法非人称受動の音声を除いたいかなる他の態の動詞も主語にも述語にもなることが出来ない。不定動詞は名詞の力によって主語にも述語にもなることが出来る。例えば‘legere est agere’がそうである。直説法非人称受動の音声について命題‘a me curritur’は非人称動詞が述語となっている。全ての派生代名詞と中性分詞は正格で主語にも述語にもなる。いかなる形容詞を保持している形容詞の語も主語になることは出来ない。名詞‘ambo’, ‘bini’, ‘singuli’, ‘terni’のいずれも主語にも述語にもならない。なぜなら、それらの副詞のいずれも限定であるからである。ある種の名詞あるいは疑問の副詞がそうであるように、いかなる比較級、最上級、呼格も主語にも述語にもならない。記号の内、あるものは主語にだけなる。例えば‘nichil’がそうである。あるものは主語にも述語にもなる。例えば‘aliquid’, ‘quilibet’がそうである。あるものは主語にも述語にもならない。例えば‘omne’, ‘neuter’, ‘nullus’, ‘aliquid’がそうである。ある時は語が語の述語になる。例えば‘Socrates currit’(ソクラテスが走る)がそうである。ある時は言表が言表の述語になる。例えば‘Animal rationale est sunstantia animata’(理性的動物は有魂の実体である)がそうである。ある時は語が言表の述語になる。例えば‘res alba est candida’(白い物体は白い)がそうである。ある時は言表が語の述語になる。

定言命題の区分について

これらの後に定言命題には二つの分割があることが知られねばならない。一方は質に従った分割であり、他方は量に従った分割である。質に従った分割は、肯定または否定である。「命題の質は何か」と問われるならば、肯定または否定と答える。量に従った分割は次のものである。命題の内あるものは全称であり、あるものは特称であり、あるものは不定であり、あるものは単称である。命題の量は何かと問われるならば、全称または特称または不定または単称と答える。全称命題とはそれにおいて全称記号を伴って共通な何かあるいは全称記号自体が主語となるような命題のことである。例えば‘*Omnis homo est animal*’ (全ての人間は動物である)と‘*Quilibet existit*’ (いかなるものも存在する)がそうである。特称命題とはそれにおいて特称記号を伴って共通な何かあるいは特称記号自体が主語となるような命題のことである。例えば‘*Quidam homo est animal*’ (ある人間は動物である)と‘*Aliquid existit*’ (何かが存在する)がそうである。不定命題とはそれにおいて記号なしに共通項辞が主語となるようなもののことである。例えば‘*Homo est animal*’ (人間は動物である)がそうである。単称命題とはそれにおいてに固有名あるいは固有名のための何らかの位置が主語であるようなもののことである。例えば‘*Socrates legit*’ (ソクラテスは読む)と‘*Hic homo disputat*’ (この人間は議論する)がそうである。

記号について

記号によって命題の量が区別されたので、記号の内あるものは全称であり、あるものは特称であり、あるものは肯定であり、あるものは否定であるということが考察されねばならない。全称肯定の記号は次のものである。‘*omnis*’, ‘*quilibet*’, ‘*quisquis*’, ‘*quicumque*’, ‘*utque*’, ‘*semper*’, ‘*cotidie*’, ‘*ubique*’などである。全称否定の記号は次のものである。‘*nullus*’, ‘*uterque non*’, ‘*nemo*’, ‘*numquam*’, ‘*omnis non*’, ‘*uterque non*’等である。特称否定は次のものである。‘*quisdam*’, ‘*aliquis*’, ‘*unus*’, ‘*alter*’, ‘*aliquando*’, ‘*alicubi*’, ‘*quandoque*’. 特称否定は次のものである。‘*aliquis non*’, ‘*alter non*’, ‘*non omnis*’, ‘*non quilibet*’等である。これらにおいて否定辞は特称肯定に後置されるか全称肯定に前置される。

他の点で同等である記号についても明らかにされる。

同様に、命題‘*Omnis homo et quidam asinus currunt*’ (全ての人間とあるロバが走る)と‘*Quoddam rudibile et omne risibile sunt*’ (ある嘶くものと全ての笑いうるものが存在する)の量について問われるべきである。特称命題と同じく全称命題の語られるべき説明規定について考察される。全称記号が前置されている命題は全称であると言われ、特称記号が前置されている命題は特称であると言われる。我々は前述の命題をある量ではなく

混合である命題と呼ぶ。

同様に‘Totus lapis est substantia’(石のみが実体である)と‘Solus Socrates est Socrates’(ソクラテスのみがソクラテスである)のような命題が知られるべきである。

‘Sophronici filius currit’(ソフロニクスの娘は走る)と‘Socrates vel Plato disputat’(ソクラテスまたはプラトンが議論する)のような命題に関して問われる。それにおいて記号なしに共通項辞が主語となっているので不定命題であると思われる。最初の方の例は不定命題、あるいは名辞に属格が前置あるいは後置されたものであると言おう。次のように言おう。もし言表が主語となるならば、その時、特称命題‘Quidam Sphronici filius currit’(あるソクロニクスの娘は走る)と同等である。一方、もし[同じ例について]斜格が主語となっていると理解するならば、単称命題である。後者の例‘Socrates vel Plato disputat’を混合命題であると言おう。

同様に命題‘Rerum quolibet est homo’(物体の内いかなるものも人間である)と‘Animalium quodlibet est asinus’(動物の内いかなるものもロバである)のような命題について異論が述べられる。それにおいて全称記号を伴って共通項辞が主語となっているが、全称命題ではないと思われる[からである]。もし属格が記号に前置されるならば、不定命題であると言おう。そして、命題‘Quarundam rerum quolibet est homo’(ある物体の内いかなるものも人間である), ‘Quorundam animalium quodlibet est asinus’(ある動物の内いかなるものもロバである)と同等である。もし[同じ例で]全称記号が前置されるならば、全称命題である。そして同様のものに対しては同様のことが言われる。

共有命題について

その上さらに、定言命題の内あるものは何らかの項辞を共有し、あるものはいかなる項辞も共有しない。何らかの項辞を共有するものの内、あるものは一方の項辞のみを共有し、あるものは両方の項辞を共有する。「人間は動物である」と「ある人間が存在する」は一方の項辞のみを共有する。

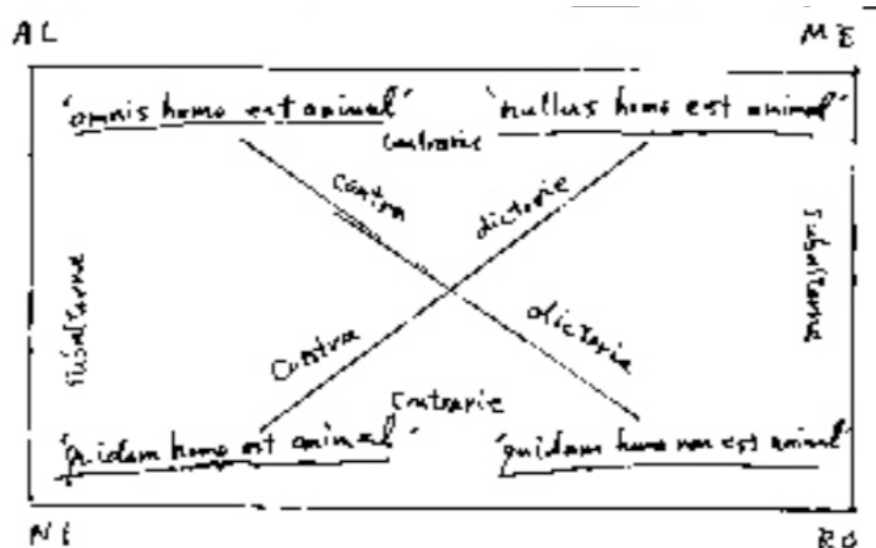
両方の項辞[を共有するものについて]

同様に、両方の項辞を共有するものの内、あるものは同じ順序で共有し、前提においてあるものは逆の順序で共有する。例えば「ある人間は動物である」と「ある動物は人間である」がそうである。

同じ順序[で共有するものについて]

同じ順序で共有するものについて最初に述べられるべきである。それ

らの内のあるものは反対対当であり、あるものは小反対対当であり、あるものは大小対当であり、あるものは矛盾対当である。反対対当とは反対の質を持ち、同じ主語と同じ述語であるような[二つの]全称命題のことである。例えば「いかなる人間も白いものである」－「いかなる人間も白いものではない」がそうである。小反対対当とは反対の質を持ち、同じ主語と同じ述語であるような[二つの]特称命題のことである。例えば「ある人間は白いものである」－「ある人間は白いものではない」がそうである。大小対当とは同じ質を持ち、同じ主語と同じ述語であるような全称命題と特称命題のことである。例えば「いかなる人間も白いものである」－「ある人間は白いものである」、同様に「いかなる人間も動物でない」－「ある人間は動物でない」がそうである。矛盾対当とは反対の質と反対の量を持つ同じ主語と同じ述語である[二つの命題]のことである。例えば「いかなる人間も動物である」－「ある人間は動物ではない」、同様に「いかなる人間も動物ではない」－「ある人間は動物である」がそうである。書かれた図でこれらのことは理解できるだろう。



反対の質を持ち、同じ主語と同じ述語である[二つの]単称命題も反対対当と呼ばれる。例えば「ソクラテスは人間である」－「ソクラテスは人間ではない」、同様に「プラトンは動物である」－「プラトンは動物ではない」がそうである。

単称命題の性質について

反対対当の性質は以下のようなものである、もし一方の命題が真であるならば、他方は偽である。しかしその逆は成立しない。なぜなら偶有性においてと同様に本性においても両方が偽だと知られ得るからであ

る。偶有性においては例えば「ある人間が白い」-「いかなる人間も白くない」がそうである。本性においては、例えば「あるフェニックスは動物である」-「いかなるフェニックスも動物ではない」がそうである。疎遠な内容については真とも偽とも知られ得ない。命題について述べたことは命題の語についても[同様に]理解される。

小反対対当の性質は以下のようなものである、もし一方の命題が偽ならば、もう一方の命題は真である。しかしその逆は成立しない。なぜなら偶有的内容においてと同様に本性的内容においても両方が真だと知られ得るからである。例えば「あるフェニックスは動物である」-「あるフェニックスは動物ではない」と「ある人間は白い」-「ある人間は白くない」がそうである。そして語についても同様に理解される。

大小対等の性質は以下のようなものである、もし全称命題が真であるならば、特称命題も真である。しかしその逆は成り立たない。そして、もし特称命題が偽であるならば、全称命題も偽である。しかしその逆は成り立たない。言明についても同様に理解されなければならない。

矛盾対等の性質は以下のようなものである。もし一方の命題が真であるならば、他方は偽である。そしてその逆も成り立つ。言明についても同様に理解されなければならない。

換位について

換位には三つのものがある、単純換位、偶有性による換位(偶有換位)、矛盾対立による換位である。単純換位とは述語が主語となり、主語が述語となり、命題の質が同じままである時のことをいう。そして特称肯定と全称否定は次のように単純換位される。「ある人間は動物である。それゆえ、ある動物は人間である」「いかなる石も人間ではない。それゆえ、いかなる人間も石ではない」。次の規則が成り立つ。

もし単純換位されるところの命題が真であるならば、単純換位された命題は真であり、もし単純換位されるところの命題が偽であるならば、単純換位された命題は偽である

さらに、ポエティウスが述べているように全称肯定命題は諸項辞の部分において換位される。例えば「全ての人間は笑うことが出来る。それゆえ全ての笑うことが出来るものは人間である」がそうである。

偶有性による換位とは質は同じままであり、量は逆になり、述語が主語になり、主語が述語になる時のことをいう。そして全称肯定と全称否定は次のように偶有性によって換位される。「全ての人間は動物である。それゆえ、ある動物は人間である」「いかなる石も動物ではない。それゆえ、ある動物は石ではない」。次の規則が成り立つ。

もし偶有性によって換位されるところの全称命題が真であるならば、換

位された特称命題は真であり、もし偶有性によって換位されるところの全称命題が偽であるならば、換位された特称命題は偽である

矛盾対当による換位とは質と量が同じままであり、換位された命題の項辞が不定へと変化する時のことをいう。そして全称肯定と特称否定は矛盾対当によって次のように換位される。「全ての人間は動物である。それゆえ、全ての非動物は非人間である」。同様に「ある人間は石ではない。それゆえ、ある非石は非人間である」。さらに、特称否定命題が矛盾対当によって換位される度に、存在条件(constantia)を伴って理解されない限り、論証は偽となることを知るべきである。なぜなら後件がそうであることなしに全件が真であり得るからである。

換位の障害について

ここでさらに命題の換位を妨げる詭弁的項辞が何であるかに注意すべきである。‘solum’, ‘tantum’, ‘preter’, ‘nisi’がそのようなものである。それゆえ、次のような命題は換位されない、‘aliud est unum solum’(何かは一つだけである)、‘Aliud est tantum animal’(何かは動物だけである)、‘Aliquid preter Socratem est homo’(ソクラテス以外の何かは人間である)。

同様に、類似しない項辞の容認は命題の換位を妨げる。そのような時、一方の項辞は述語に含まれ、他方の項辞は主語に含まれている。例えば次のような命題は[それぞれ]複数のものと言われるのでなければ換位されない、‘Quoddam entimema est verum’(ある省略三段論法は真である)、‘Quoddam mancipium est bonum’(ある奴隷は良い)、‘Quedam propositio est simplex’(ある命題は単純である)。もし名辞‘verum’, ‘album’, ‘simplex’が名詞と理解されるならば、これらの命題の換位は妨げられない。

同様に、主語になることができない項辞が述語になっているいかなる命題も換位されない。それゆえ命題‘Socrates est albus’(ソクラテスは白い)と‘Plato disputat’(プラトンは議論する)は換位されない。なぜなら語がそうであるように形容詞[であること]を保持している形容名辞は主語となることが出来ないからである。しかし次のような論証は単純換位からのロクス(locus)である。‘Socrates est albus; ergo albus est Socrates’(ソクラテスは白い。それゆえ、白いものはソクラテスである)、‘Plato disputat; ergo disputans est Plato’(プラトンは議論する。それゆえ、議論する者はソクラテスである)。

同様に、過去あるいは未来に関する形容名辞あるいは形容の表示作用を持つ項辞を含むいかなる命題も換位することが出来ない。それゆえ、次のような命題は換位されない、‘Quoddam album fuit Socrates’(ある白いものはソクラテスであった)、‘Quidam senex fuit puer’(ある老人は若者であった)。

仮言命題について

これらの後に仮言命題について語られるべきである。複合命題あるいは仮言命題と呼ばれるものは同じものとして扱われねばならない。ipothetica(仮言的)はconditionalis(条件的)と同様に言われる。ギリシア語の‘ipothesis’(仮言)はラテン語で‘conditio’(条件)と言われる。あるいはipotheticaは、[ラテン語で]‘sub’である[ギリシア語の]‘ipos’と[ラテン語で]‘positio’である[ギリシア語の]‘thesis’に由来してそのように呼ばれる。‘ipothetica’は‘subpositiva’のような意味である。それにおいて一つの命題が別の命題にの下に措定される(subponitur)あるいは一つの言表が別の言表の下に措定される[からである]。

複合命題は諸部分を持つものとは考えられないが、主部分に部分命題を持つものと考えられる。さらに、全ての仮言命題は二つの部分を持つ、つまり前件と後件のこと、あるいはより前にある項とより後ろにある項である。例えば「もしソクラテスが人間ならば、ソクラテスは動物である」がそうである。この命題の前件は「ソクラテスは人間である」であり、後件は「ソクラテスは動物である」である。

仮言命題の七つの種について

仮言的命題には七つの種がある: 条件命題、場所命題、原因命題、時間命題、連結命題あるいは連言命題、選言命題、付帯命題である。条件命題とはその前件に接続詞‘si’(もし)が前置されたもののことである。例えば‘Si tu curris, tu moveris’(もし君が走るならば、君は動く)がそうである。時間命題とはそれにおいて時間的副詞が置かれているもののことである。例えば‘Dum Socrates currit, Plato movetur’(ソクラテスが走る間、プラトンは動く)がそうである。原因命題とはそれにおいて原因的接続詞が置かれているもののことである。例えば‘Quoniam Tullius est homo, Tullius est risibile’(トゥリウスは人間であるので、トゥリウスは笑うことができる)がそうである。場所命題とはそれにおいて場所の副詞が置かれているもののことである。例えば‘Tu sedes ubi ego sto’(私が立っている所に(ubi)君は座る)がそうである。連結命題あるいは連言命題とはそれにおいて連結的接続詞によって後件(consequens)が前件に結合されたもののことである。例えば‘Socrates est homo et Brunellus est asinus’(ソクラテスは人間でありかつブルネッルスはロバである)がそうである。選言命題とはそれにおいて選言的接続詞によって後件が前件に結合されたもののことである。例えば‘Aliquid currit vel nichil movetur’(何か動くあるいは何物も動かされない)がそうである。付帯的命題とはそれにおいて付帯に関する記号が置かれているもののことである。例えば‘Magister legit ut discipulus proficiat’(教師が読むので生徒は上達する)がそうである。

条件命題において「もし」(si)が前置されたものは前件と呼ばれるこ

とに注意せよ。原因命題においてどのような順序であれ諸部分を作り出す原因的接続詞が前置されたものが前件と呼ばれることに注意せよ。付帯命題において付帯に関する記号が前置されたものは後件である。他の全ての命題についても提示される順序が留意される。より先に述べられる命題が前件であり、より後に述べられる命題が後件である。

経験が浅い人々にとっては仮言命題に見える連言または選言を主語または述語に含むある種の命題が存在する。例えば次のようなものである。‘Et Socrates et Plato est animal’ (ソクラテスとプラトンは人間である)、‘Socrates et legit et disputat’ (ソクラテスは読みかつ議論する)、‘Homo vel margarita est lapis’ (人間あるいは真珠は宝石である)、‘Tu es vel non es homo’ (君は人間であるまたはない)。これら全ての命題は定言命題である。そして、これらの命題と仮言命題の種差はこれらの命題のいかなるものも主部分に部分命題を持たないということである。

もつれた命題について

しかし、次のようなもつれた命題と呼ばれる命題について疑いが持たれる。‘Marcus est id quod est Tullius’ (マルクスはトゥリウスであるところの者である)、‘Homo est id quod est animal’ (人間は動物であるところのものである)、‘Tantus homo est Socrates quantus homo est Plato’ (人間がプラトンである限り、全ての人間はソクラテスである)。ロクス(localis)が仮言命題と言われることが出来る理拠があるのと同様に、もつれた命題が仮言命題と言われることが出来る理拠がある。

このようなもつれた命題のあるものは仮言命題であり、あるものは定言命題である。[そのことに対して]私は是認も否認もしない。だが[もつれた命題は]定言命題よりも仮言命題と言われるのがより安全である。しかし、[もつれた命題は]仮言命題の何の種に含まれるのかが問われる。これについて、前に述べた仮言命題の分割は十分ではないと言える。ある種の命題は造語で量的命題と呼ばれ得るものである。例えば‘Tantus est Socrates quantus Plato’ (ソクラテスはプラトンと同じくらい背が高い)がそうである。あるものは類似命題と呼ばれ得る。例えば‘Talis homo est Marcus qualis Tullius’ (トゥッリウスであるところの人はマルクスである)がそうである。あるものは実体命題と呼ばれ得る。例えば‘Id quod est Marcus est Tullius’ (マルクスであるところの者はトゥッリウスである)がそうである。— もしこのような命題が仮言命題と呼ばれねばならないのであればであるが。

仮言的単純命題について

仮言命題の内あるものは単純であり、あるものは複合である。単純命題はその部分にいかなる定言命題も持たないものと呼ばれる。複合命題

はその部分に部分仮言命題を持つものと呼ばれる。
単純仮言命題については十分に語られた。

仮言的複合命題について

複合命題の内あるものは定言命題の前件と仮言命題の後件から成る。例えば「もしソクラテスが人間ならば、ソクラテスは動物でありかつソクラテスは健康である」(Si Socrates est homo, Socrates est animal et ipse est sanus)がそうである。あるものは仮言命題の前件と定言命題の後件から成る。例えば「ソクラテスが人間でありかつソクラテスが動物ならば、ソクラテスは実体である」(Si Socrates est homo et ipse est animal, Socrates est substantia)がそうである。あるものは二つの仮言命題から成る。「もしマルクスが走りかつマルクスが白いならば。トゥリウスは動きかつトゥリウスは有色である」(Si Marcus currit et ipse est albus, Tullius movetur et ipse est coloratus)がそうである。

同様に、反対であるものには三つの部分があり、一つは語についてで、もう一つは命題についてである。問答と結論について語ることが残されている。

II 問答と問題について

質問(interrogatio)とは返答を引き起こす言表のことである。interrogatioと呼ばれようとquestioと呼ばれようとproblema(問題)と呼ばれようとも同じものである。一方、problemaは何であれ疑わしいquestioであるものとも言われる。ここでボエティウスが説明しているように、questio(問題)とは疑わしいものあるいは曖昧なものについて形成される命題のことである。

問題の分割について

問題の内あるものは教示的であり、あるものは弁証論的である。教示的問題とはその内に次のような語が置かれている問題のことである、‘quid’(何)、『quare’(どのような)、『quantum’(どれほど)やその類のもの。例えば「人間とは何か」、「動物とはどのようなものか」、「ポンドとはどれほどの量か」がそうである。弁証論的問題とはそれに対して「はい」または「いいえ」で答えるような問題のことである。例えば「世界は永遠であるか」がそうである。

弁証論的問題の分割について

弁証論的問題の内あるものは単純であり、あるものは複合的である。単純な問題と定言である問題と同じものである。複合的問題は仮言である問題と同じものである。単純命題は定言命題に由来する問題のことである。単純な問題はボエティウスが述べたように前述の例のように述語が主語に内属するかが問われることと同様である。複合的問いは仮言命題に由来する問題のことである。例えば「もしトゥリウスが笑うことが出来るものならば、マルクスは人間であるか否か」がそうである。

単純な問題あるいは諸問題(*problematibus*)について

単純な*questionum*あるいは*problematum*には四つの類がある。類について、偶有性について、特性について、種差について[の四つ]である。何かが措定されたものの類であるかが問われる時、類についての問題となる。例えば「動物は類であるか否か」がそうである。

類についての問題はそれにおいて実体でありかつ共通なものが述語づけられるまたは除外されるような問題とも言われる。例えば「植物は理性的か否か」がそうである。

偶有性についての問題とは措定されたものが[別の]措定されたものに起こるかどうかと問われるところの問題のことである。例えば「白色は白鳥に起こるか否か」がそうである。偶有性についての問題はそれにおいて共通でありかつ偶有であるものが述語づけられるあるいは除外されるような命題に由来する問題とも言われる。例えば「白鳥は白色であるか否か」がそうである。

固有性についての問題とはそれにおいて措定されたものが[別の]措定されたものの固有性であるかが問われる問題のことである。例えば「呼吸され得ることが空気の固有性であるか否か」または「実体が反対のものを受け入れることが出来ることは固有か否か」がそうである。固有性についての問題はそれにおいて偶有的で换位可能なものが述語づけられるあるいは除外されるような命題に由来する問題とも言われる。例えば「人間は温和な性質の動物であるか否か」がそうである。

定義についての問題とは措定されたものが[別の]措定されたものの定義であるかどうかと問われるような問題のことである。例えば「理性的で可死的な動物が人間の定義か否か」がそうである。定義についての問題はそれにおいて定義が述語づけられるあるいは除外されるような命題に由来する問題とも言われる。例えば「全ての白色は視覚を散乱させる色であるか否か」がそうである。

これらが問題についてである。

結論について

結論とは推論の(illativa)接続詞が前置された論証の最後の部分のことである。ポエティウスが説明しているように結論とは論拠であるか、論拠によって是認された命題のことである。

結論の内あるものは尤もらしいものであり、あるものは尤もらしくないものであり、あるものは中立的である。尤もらしい結論とは聞き手の魂が自発的に同意するような結論のことである。尤もらしくない結論とは何か調子外れなことを主張する結論のことであり、何らかの真であるものとの類似性を持たないような結論のことである。ある時は真であるものとの類似性を主張するが、ある時は調子外れなことを主張するような結論は尤もらしい結論でも尤もらしくない結論でもない。

真なる帰結を推論に関する接続詞が前置された論証の最後の部分である。ポエティウスは以下のように記述している「帰結は議論によってあるいは諸議論によって是認された命題である」。

論証について

論証とは言表による論拠の展開のことである。いかなる論証も論拠を展開するが、何も表示作用しない。逆に条件命題は論拠を表示作用するが、何も展開しない。

論証の種について

論証には四つの種がある: 三段論法、省略三段論法、例示、帰納である。三段論法については後で語られる。省略三段論法とはそれにおいて一つのものから、あるいはあたかも一つであるかのようなものから[別の]一つのもので導かれるような論証のことである。例えば「世界は作られたものである、それゆえ世界は始まりを持っている」がそうである。帰納とはそれにおいて特殊から普遍へと、あるいは共特殊(comparticulare)へと前進するような論証のことである。ここで「特殊」で特称命題を理解してはいない。そうではなく、より共通でない何かを理解している。次のようにである。

「この人間はただ一人の人間であるものである
あの人間もそうである、3人目も、四人目も、そして残りについてもそうである
それゆえ、いかなる人間もただ一人の人間であるものである、
より一般には
全ての頭はただ一つだけの頭を持つものである」

特殊から特殊へは次のように前進する。

「船の操縦においても国家においても他のものにおいても
指導者は籤によってではなく技術によって選ばれるべきである
それゆえ、学派の指導者においても同様である」

しかしこの帰納の第二の種[である特殊から特殊への前進]は尤もらしいだけであり、必然的ではない。

例示とはそれにおいて一つの類似したものから別の類似したものへと前進するような論証のことである。次のようにである。

「この者は盗みを犯したので首吊りに値する、
それゆえ類似によってあの者も首吊りに値する

しかし、この論証は弁証論においてロクス(locus)を持たない。なぜなら例示は必然的な力を持たないからである。だが、例示は説得に有用である。そして全ての論証は必然であるか尤もらしくないかのどちらかであることに注意せよ。このことは条件[命題]が必然であるか不可能であるかのどちらかであることと同様である。同様に全ての論拠は必然であるか不可能であるかのどちらかである。

論拠について

論拠とは疑わしい物事に関して信念を作り出す理拠(ratio)、つまり信念を作り出すことの出来る理拠のことである。我々の内の多くの者が疑わしいものがまたは疑わしそうなものが吟味されるのでなければ、論拠は形成されないと断言している。もしその意見が正しいのならば、全ての論証も、それ自体で知られ論証されることが出来ない格率が諸命題を結合するような全ての論証的三段論法も無くなってしまう。

論証について異なる人々の間で異なる見解がある。ある者は論証における命題の前提であると言い、ある者は命題の前提である語だと言い、ある者は一般的な仮言命題の不定詞句(dictum)であると言う。一般的な仮言命題とはアプレイウスが特に一般的あるいは普遍的と言うようないかなるものについても真であるかいはかなるものについても真ではないような命題のことである。このような命題と変形された命題は同じものである必要がある。そして[変形された命題も]同様に一般的と呼ばれる。

我々は論拠とは論証から変形された条件仮言命題である不定詞句であると言おう。いかなる論証も条件命題へと変形されることが出来る。同様にいかなる仮言命題の為にも論拠が利用できる。例えば次のものがそうである。

「天体は丸いする
それゆえ、天体は回転するものである」

この論証は次の仮言命題に変形することが出来る。

「もし天体が丸いならば、天体は回転するものである」

そしてこの仮言言表は‘Si celum est rotundum celum esse volubile’(もし天体が丸いならば、天体は回転するものであるということ)である。それゆえこの論拠は先の論証が展開されたものであり、これは論証の結論によって言われるものである。そしていかなる結論によってもあるものが言われ、あるものが導かれる。すなわち結論の表示作用するものが導かれ、論証によって展開される論拠が言われる。同様のことについては同様のことが成り立つ。

論拠の種について

論拠の内あるものは必然であるだけであり、あるものは必然かつ尤もらしいものであり、あるものは必然でも尤もらしくもなく、あるものは必然でないだけである。必然であるだけの論拠は例えば次のものがそうである。

「月が直線上に間に置かれている

それゆえ、太陽は食を被る」

尤もらしいだけの論拠は次のものがそうである。

「この者は彼の母である

それゆえ、この者は彼を愛する」

尤もらしくかつ必然である論拠は次のようなものがそうである。

「世界は創造されたものである

それゆえ、世界は始まりを持っている

尤もらしくも必然でもない論拠は

「ディオゲネスは角を失っていない

それゆえ、ディオゲネスは角を持っている」

論拠についてはここまでである。

三段論法について

論証の内でアリストテレスが言うように三段論法は論駁するのにより強力で効果的である。それゆえ、三段論法について語らねばならない。

三段論法とはあるものが指定されることによって、指定されたものから必然的に何か導かれるような言表のことである。三段論法の内あるものは定言であり、あるものは仮言である。仮言三段論法とは仮言命題から成る三段論法のことである。例えば次のものがそうである。

「もしソクラテスが人間ならば、ソクラテスは動物である
しかしソクラテスは人間である
それゆえ、ソクラテスは動物である」

定言三段論法について

定言三段論法は定言命題のみから成る三段論法のことである。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
全ての笑いうるものは動物である
それゆえ全ての笑いうるものは動物である」

定言三段論法は結論の前に置かれた三つの項辞と二つの命題から成る。二つの命題の内一方は大前提と呼ばれ、先に置かれる方の命題である。もう一方は小前提と呼ばれ、*assumptio*(前提)と同じものである。三つの項辞と二つの命題が定言三段論法になるために、二つのものが必要である、それはつまり式と格である。式とは三段論法における命題の配置のことであり、格とは二つの諸命題における項辞の配置のことである。[格は以下の配置の]いずれかである。第一の命題(大前提)で主語であるものが第二の命題(小前提)で述語である時に第一格と呼ばれる。同じ項辞が述語であり、異なる諸項辞が主語である時に第二格と呼ばれる。同じ項辞が主語であり、異なる諸項辞が述語である時に第三格と呼ばれる。

三つの項辞は三つの名称で表される。一つは中名辞と呼ばれ、他の一つは大名辞と呼ばれ、三つ目は小名辞と呼ばれる。いかなる格においても中名辞とは大前提と小前提で共通の項辞のことである。大名辞とは大前提において中名辞と共に置かれている項辞のことである。小名辞とは小前提に中名辞と共に置かれている項辞のことである。

例えば次の例で明らかである。

全ての人間は動物である
かつ全ての笑いうるものは人間である
それゆえ全ての笑うことが出来るものは動物である

「人間」は中名辞であり、「動物」は大名辞であり、「笑うことが出来るもの」は小名辞である。

第一格について

第一格においてある時は全称、ある時は特称、ある時は肯定、ある時は否定が結論づけられることに注意せよ。第二格においては否定だけであり、ある時は全称、ある時は特称が結論づけられる。第三格においては特称だけであり、ある時は肯定、ある時は否定が結論づけられる。

同様に、第一格においては九つの式があり、最初の四つの式においては常に小名辞について大名辞が結論づけられなければならない。第二格と第三格における全ての式についても同様である。[第一格の]残りの五つの式においては常に大名辞について小名辞が結論づけられる。

同様に、もし諸前提の一つが特称になるならば、結論も特称になる。しかし逆は成り立たない。同様に、もし前提のうち一つが否定になるならば、結論も否定になる。そしてその逆も成り立つ。

第一格は項辞の主要な(prima)配置とも呼ばれる。なぜなら第二格と第三格は第一格から形成されるからである。大前提が换位されることで第二格となり、小前提が换位されることで第三格となる。あるいは第一格はそれにおいて全ての問題の類が三段論法で結論づけられるような格とも言われる。あるいは第一格はその最初の四つの式に他の全ての式が還元されるあるいはその四つの式から他の全ての式が形成されるような格と言われる。

それゆえ、第一格には九つの式がある。第一式は全称肯定たちから全称肯定を推論する。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
全ての笑いうるものは人間である
それゆえ全ての笑いうるものは動物である」

次の規則が成り立つ。

もし何かが何かに述語付けられ、第一の主語が第二の主語に述語づけられるならば、第一の述語は第二の主語に全称で述語付けられる²

第一格第二式は肯定の中項を持ち、すべて全称である諸命題から成る。例えば次のものがそうである。

「いかなる人間もロバではない
全ての笑いうるものは人間である
それゆえいかなる笑いうるものもロバではない」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に全称で除外され、かつ中項が最終項に全称で述語づけられるならば、第一項は全称で除外される。

第三式は最初の命題が全称であり、[残り]二つの命題が特称である全て肯定である諸命題から成る。

「全ての人間は動物である

²小名辞をS、中名辞をM、大名辞をPと置く。ここで「何かが何かに述語づけられる」は小前提(M est P)を表す。大前提からではなく小前提から説明されている点に注意せよ。「第一の主語(M)が第二の主語(S)に述語づけられる」とは大前提(S est M)を表す。「第一の述語」は小前提の述語Pである。以下の三段論法についても同様に説明される。

ある笑うことが出来るものは人間である
それゆえある笑うことが出来るものは人間である」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に全称で述語づけられ、かつ中項が最終項に特称で述語づけられるならば、第一項は最終項に特称で述語づけられる

第四式は特称否定を導出する全称否定と特称肯定から成る。例えば次のものがそうである。

「いかなる人間も石ではない
ある笑うことが出来るものは人間である
それゆえある笑うことが出来るものは人間ではない」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項から全称で除外され、かつ第一項が最終項に特称で述語づけられるならば、第一項は最終項から特称で除外される

これら第一格の最初の四つの式は完全な三段論法や三段論法の四つの構成要素と呼ばれることを知るべきである。完全な三段論法は他の全ての三段論法がそれらに還元される、あるいはそれらから他の全ての三段論法が形成されるようなものであると言われる。三段論法の四つの構成要素はそれにおいて大名辞が小名辞について結論づけられるようなものと言われる。

第五式は第一式から結論を偶有換位することによって形成される。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
全ての笑うことが出来るものは人間である
それゆえある動物は笑うことが出来るものである」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に全称で述語付けられ、かつ中項が最終項に全称で述語付けられるならば、最終項は第一項に特称肯定で述語付けられる

第六式は第二式から結論を単純換位することによって形成される。例えば次のものがそうである。

「いかなる人間もロバではない
全ての笑うことが出来るものは人間である
それゆえ、いかなるロバも笑うことが出来るものではない」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項から全称で除外されかつ中項が最終項に関し全称で述語付けられるならば、最終項は第一項に関し全称で除外される

第七式は第三式から結論を単純換位することによって形成される。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
ある笑うことが出来るものは人間である
それゆえある動物は笑うことが出来るものである」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に全称で述語付けられ、かつ中項が最終項に特称で述語付けられるならば、最終項は第一項に特称で述語付けられる

第八式は特称否定を導出する全称肯定と全称否定から成る。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
かついかなる石も人間ではない
それゆえいかなる動物も石ではない」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に全称で述語付けられ、かつ中項が最終項から全称で除外されるならば、最終項は第一項から特称で除外される

第八式は諸命題の順序を交換し、全称否定を単純換位し、全称肯定を偶有換位することによって、第四式へと還元される。次のようにである。

「いかなる人間も石ではない
かつある動物は人間である
それゆえ、ある動物は石ではない」

第九式は特称否定を導出する特称肯定と全称否定から成る。例えば次のものがそうである。

「ある人間は笑うことが出来るものである
かついかなるロバも人間ではない
それゆえ、いかなる笑うことが出来るものもロバではない」

次の規則が成り立つ。

もし第一項が中項に特称で述語付けられ、かつ中項が最終項に全称で除外されるならば、最終項は第一項から特称で除外される

第九式は第四式に同様に諸命題の順序を交換し、大前提と小前提の両方を単純換位し結論を同じままとすることによって還元される。次のようにである。

「いかなる人間もロバではない
かつある笑うことが出来るものは人間である
それゆえ、ある笑うことが出来るものはロバである」

第二格について

続いて第二格について[述べよう]。第二格においても式の内四つのみが三段論法で結論づけられる。第一式は肯定の中項のみを持つ全称の諸命題のみから成る。例えば次のものがそうである。

「いかなる石も人間ではない
かつ全ての笑うことが出来るものは人間である
それゆえ、いかなる笑うことが出来るものも人間ではない」

次の規則が成り立つ。

もし中項が第一項から全称で除外され、かつ中項が最終項に全称で述語付けられるならば、第一項は最終項から全称で除外される

この第二格第一式は第一格第二式へと大前提を単純換位することによって還元される。

第二格第二式は最初の命題のみが肯定である全称である諸命題のみから成る。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
いかなる石も動物ではない
それゆえ、いかなる石も人間でない」

次の規則が成り立つ。

もし中項が第一項に全称で述語付けられ、かつ中項が最終項から全称で除外されるならば、第一項は最終項から全称で除外される

第二格第二式は第一格第二式に両方の命題の順序を交換し、大前提と結論を単純換位することによって還元される。

「いかなる動物も石ではない
かつ全ての人間は動物である
それゆえ、いかなる人間も石ではない」

第二格第三式は特称肯定を導出する全称否定と特称肯定から成る。例えば次のものがそうである。

「いかなるロバも人間ではない
かつある笑うことが出来るものは人間である
それゆえいかなる笑うことが出来るものもロバではない」

次の規則が成り立つ。

もし中項が第一項から全称で除外され、かつ中項が最終項に特称で述語付けられるならば、第一項は最終項から特称で除外される

第二格第三式は第一格第四式に大前提を単純換位することによって還元される。次のようにである。

「いかなる人間もロバではない
かつある笑いうるものは人間である
それゆえ、ある笑いうるものはロバではない」

第二格第四式は特称肯定を導出する全称肯定と特称否定から成る。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は笑うことが出来るものである
かつある動物は笑うことが出来るものではない
それゆえ、ある動物は人間ではない」

次の規則が成り立つ。

もし中項が第一項に全称で述語付けられ、かつ中項が最終項から特称で除外されるならば、第一項は最終項から特称で除外される

第二格第四式は不可能による還元によって第一格第一式から論証される。次のようにである。最初の命題(大前提)は同じままであり、結論の矛盾が前提される。そして、前提の矛盾が導出される。

第三格について

第三格には六つの式がある。どの式においても結論は特称である。第一式は特称肯定を導出する二つの全称肯定命題から成る。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は動物である
かつ全ての人間は実体である
それゆえ、ある実体は動物である」

次の規則が成り立つ。

もしあるものどもにおいて一方が何かに全称で述語づけられ、他方が同じものに全称で述語づけられるならば、何かは何かに特称で述語づけられる

第三格第一式は第一格第三式に小前提を単純換位することによって還元される。

第二式は特称否定を導出する全称否定と全称肯定から成る。例えば次のものがそうである。

「いかなる人間も石ではない
かつ全ての人間は笑うことが出来るものである
それゆえ、ある笑うことが出来るものは石ではない」

次の規則が成り立つ。

もしあるものどもにおいて一方が何かから全称で除外され、他方が同じものに全称で述語づけられるならば、何かは何かから特称で除外される

第三格第二式は第一格第四式に小前提を偶有換位することによって還元される。

第三式は特称肯定を導出する特称否定の大前提と全称肯定の小前提から成る。例えば次のものがそうである。

「ある人間は白い
全ての人間は笑うことが出来るものである
それゆえ、ある笑うことが出来るものは人間である」

次の規則が成り立つ。

もしあるものどもにおいて一方が何かから全称で除外され、他方が同じものに全称で述語づけられるならば、何かは何かに特称で述語づけられる

第三格第三式は第一格第三式に大前提を単純換位し、命題の順序を逆にする、つまり大前提を小前提とし小前提を大前提とすることによって還元される。

第三格第四式は特称肯定を導出する全称肯定の大前提と特称肯定の小前提から成る。例えば次のものがそうである。

「全ての人間は笑うことが出来るものである
ある人間は白いものである
それゆえ、ある白いものは笑うことが出来るものである

規則は第三式と同様である。第三格第四式は第一格第三式に小前提を単純換位することによって還元される。

第三格第五式は特称否定を導出する特称否定と全称肯定から成る。例えば次のものがそうである。

「ある人間は白くない
全ての人間は動物である
それゆえ、ある人間は白くない」

次の規則が成り立つ。

もしあるものどもにおいて一方が何かから特称で除外され、他方が同じものに全称で述語づけられるならば、何かは何かから特称で除外される

第六式は特称肯定を導出する全称否定と特称肯定から成る。次のものがそうである。

「いかなる人間も石ではない
ある人間は白い
それゆえ、ある白いものは石ではない」

次の規則が成り立つ。

もしあるものどもにおいて一方が何かから全称で除外され、他方が同じものに特称で述語づけられるならば、何かは何かから特称で除外される

第三格第六式は第一格第四式に小前提を単純換位することによって還元される。

これらが三段論法の三つの格についてである。

全称肯定は次の四つの文字・E・,・I・,・O・,・U・で表されることに注意すべきである。全称否定は次の・L・,・M・,・N・,・R・で表される。特称肯定は次の三つ・A・,・S・,・T・で表される。特称否定は次の三つ・B・,・C・,・D・で表される。

VIO・NON・EST・LAC・VIA・MEL・VAS・ERB・ARC

次の四つの音声は第二格の四つの式を表す。

REN・ERM・RAC・OBD・

第三格の六つの式は次の六つの音声で表される。

EVA・NEC・AUT・ESA・DUC・MAC・

無用な発話について

無用な発話について

それにおいて言表の同じ部分で同じ項辞の不要な繰り返しが起こっているような全ての発話(locutio)は無用(nugatoria)である。例えば‘Socrates est homo homo albus’(ソクラテスは白い人間人間である)がそうである。

同様に、それにおいて一方の意味表示から他方の意味表示が理解されるような二つの言表が連なっているような発話は全て無用な発話である。例えば‘Homo et animal sunt Socrates et homo sunt’(人間かつ動物であるものはソクラテスかつ人間である)

同様に、それにおいて間に置かれた結合的接続詞のみによって同じ言表が結合されているような発話は、[同じ]言表が数字または指示代名詞でない限り全て無用な発話である。例えば‘homo et homo sunt’(人間と人間が存在する)がそうである。

しかし‘duo’(二)は数字である名辞であるので、‘Duo et duo sunt quatuor’(二たす二は四である)は妥当な発話である。同様に指示代名詞‘iste’(それ)について発話‘Iste et iste sunt albi’(それとそれは白い)は妥当な発話である。

同様に、それにおいて言表の同じ部分でその意味表示が常に同じものに合致する二つの言表が置かれているような全ての発話は無用な発話で

ある。例えば‘Homo risibilis legit’(笑うことが出来る人間は読む)がそうである。

同様に、言表の同じ部分でその意味表示が常に同じものに合致しない時、発話は無用である。例えば‘Asinus risibilis currit’(笑うことが出来るロバが走る)と‘Homo rudibilis ambulat’(嘶くことが出来る人間が走る)がそうである。

同様に、言表‘qui’がその意味表示が常に同じものに合致する、あるいは決して同じものに合致しない諸言表の間に置かれている時、発話は無用である。例えば‘Homo qui est rudibilis; asinus qui est risibilis’(嘶くことが出来る人間、笑うことが出来るロバ)がそうである。

同様に、全体が部分に、あるいは部分が全体に加えられる時、発話は無用である。例えば‘Francia et Parisius ’(フランスとパリ)と‘Parisius et Francia’(パリとフランス)がそうである。

同様に、不適切な論証における発言は無用である。例えばもしロバについての論証で‘Iste homo currit’(その人間は走る)と言う時やその逆の場合がそうである。